

人生 「四知」を意識して

最近の新聞の三面記事は、世の中の暗さを連想させるものばかりで、見出しを見ただけで心が滅入^{めい}ってしまう。だから私は、異常な事件だから新聞記事になるので、新聞やテレビに名前の載ることのない大多数の人々は、正直で善良なのだと考えることにしている。

ここで性善説の妥当性を論じるつもりはないが、せめて、全ての人は生まれた時に天から賦与された「良心」を持っていると信じた^{そくいん}い。人によっては環境の違いによって惻隱にも濃淡の差はあるだろうが、人間の行動は時と場合によるので、それが最善か否かは自分にも他人にも計れない。結果の原因は複雑で、家族、友人を含む生育歴と併せて、書物との出あい、環境や師との出会い、教育、意志の強弱などのわずかな差によるものであるに違いない。

昔から粗衣粗食に不平を云わない人には、清廉^{せいれん}な心の持ち主が多く、美衣美食に耽る者は強欲で節度がないと云われてきた。ほしいものはほとんど手に入れながら、地位や名誉、羨望と欲望、さらに、権力志向で、心の中の悪を助長させ、真心まで狂わせてしまうからであろう。裁判の判決理由を聴いていると、被告に「なぜ?」「どうして?」と反問したくなる事例が多く、「あなたはどれだけ我慢や努

力をしてきたのですか」と問いたくなる場合が多くある。お金は無いより有った方がよいに決まっている。これは貨幣経済の原理である。しかし、生活の仕方が野放図だったり無計画な生活を続けていたりすると、お金は羽が生えて飛んでいき消えてしまう。しかも、巷には嘲笑と軽蔑が残る。これを避けるには今も昔も方法は唯一つ「い入るをはか図りていす出るをせい制す」(二宮尊徳) しか方法はない。

昔の中国に、実際にあった有名な話が残っている。後漢の時代(西暦一世紀前後)、楊震ようしんという人が掖県えきけんの太守(日本流に言えば県知事)に任命された。すると、かつての部下であった男が夜陰にまぎれて現れ、下心あり気に金品を差し出した。楊震が断ると、男は「ここには私とあなたしか居りませんからどうぞ受け取ってください」と云ったのである。

楊震の返答である。「天知る、地知る、我知る、子知る」と云ったのである。つまり、この悪事は誰も見ていないことはない。「天も地も私も君も知っているではないか」と云ったのである。これを「四知」と云い、現代風にいえば自責の念を意識したものである。悪事が露見するのを懼おそれて生きるのは地獄である。しかも、絶対「善」と思われている「人に迷惑をかけない生き方」は、正しい理ことわりとは

云え切れないから事は複雑である。人間社会は他を自分と同価値として前提できるから意味を持つ。でも、全てが同じ価値を共有しているとは限らないのである。

ところで、中国の「神」の概念とわが国の「神」とは少しニュアンスが違っている。中国の「神」はギリシャ神話に登場するスーパーマン的な要素を持つが、わが国の「神」は八百万やおよろずの神かみといわれるようにそれぞれに役割を担っていて、しかも絶対神である。八百万は少々大袈裟ではないかと思えるが、村落には必ず鎮守があり、路傍には「馬頭」や「二十三夜」を祀った碑がいたところにある。

要約すれば大小の山河だけではなく、日本では山川草木のすべてに「神」が宿っていることになる。これは農耕民族の大きな特徴なのだ。農作物の収穫は、人間の力や努力だけでは如何ともし難い「神」が支配するものだと考えたのかも知れない。

なお、中国にも「神」に近い意味の「天」という言葉がある。これは陰陽道から出た「易経」に関係した言葉かも知れない。つまり、農耕民族は受身の生活であり、肉食を主とし「攻める」、「追い詰める」の生活とはそもそも文化が違っていたのである。目鼻立ちが似ていて漢字圏というだけでは説明のつかないものもある。

中国はあれほどに広い国土を持ちながら、南沙諸島や尖閣諸島を武力で恫喝しながら領有権を主張する態度は、中国文化に敬意と尊敬を持つ私でさえ支持出来はしない。朝鮮半島を含めて隣国同士はなぜ友好関係を確立できないのだろうか。かつての歴史はこのアジアの脆弱さを欧州や露国に突かれた悲劇だったのではなかったのか。民族の誇りと歴史はもはや、国を犠牲にするほどの価値を持たない時代になったのである。

楊震は青い地球を見ることも無くこの世を去った。彼は遙かな空から現世を眺め見て、人類の進化を喜んでいるだろうか。宇宙から唯一見えるという人口建造物の万里の長城は、その大きさに驚いてばかりはいられない。中国の王朝は幾度も外敵に奪われた歴史がある。長城はその遺跡でもある。それにしても中国中華思想の叡智はなぜ平和的な外交によって、問題を解決しようとしなかったのか。

人間の進化は余り進まないように見える。我々はこれまでのようにカインの末裔として生きるか、まつえい不空羅索觀音ふくうけんさくかんのんの使者として生きるかは、各自の判断を待つしかないようだ。もし、楊震の独白を聴くことができたなら、中国は虫メガネでしか確認出来ないような小島のために、国際的な信用を捨てるはずはない。